



## ダイセル化学工業株式会社

石 利 治\*

会社名 ダイセル化学工業株式会社  
 設立 大正8年9月8日  
 資本金 106億7262万4千円  
 (昭和57年3月末現在)  
 代表者 取締役社長 久保田美文  
 従業員数 3079名(昭和57年3月末現在)  
 大阪本社 大阪府堺市鉄砲町1  
 〒590 0722 (27) 3031  
 東京本社 東京都千代田区霞が関3-8-1  
 虎の門三井ビル  
 〒100 03 (507) 3175  
 名古屋支社 名古屋市中村区名駅3-25-9  
 堀内ビル  
 〒450 052 (582) 8511  
 営業所 福岡・福井  
 海外事務所 ニューヨーク・ロスアンゼルス  
 ・デュッセルドルフ  
 研究所 総合研究所(姫路)・フィルター  
 ー研究所(堺)  
 工場 大竹(広島県)・播磨(兵庫県)  
 ・網干(姫路市)・神崎(尼崎  
 市)・堺・新井(新潟県)  
 関連会社 ポリプラスチック㈱・大日本  
 プラスチックス㈱・三国プラス  
 チックス㈱・協同酢酸㈱ほか十  
 数社

### 1. 当社のあらまし

化学工業は常に新しい素材を創造する産業として、私たちの暮らしの中にその姿を変え、形を変えて、その役割を果してきております。

その化学工業界において、60有余年にわたり伝統と技術にみがかれ、若々しいバイオニア精

神にみちあふれたユニークな総合化学メーカー……これが当社の姿といえるのではないでしょうか。

大正8年、セルロイド8社の合併により、大日本セルロイド㈱を設立、わが国最大のセルロイドメーカーとして発足したのが、当社の事業の始まりであります。

以来、セルロイドを原料として、わが国で初めて写真フィルムの国産化を達成し、昭和9年には富士写真フィルム㈱を設立、さらにセルロイドの不燃化の研究から、酢酸セルロース事業に進出、そして原料としての酢酸の自給を緒として、アセチレン系有機合成事業を確立いたしました。

その後、石油化学時代の到来とともに、エチレン・プロピレンを利用して、多岐にわたる高品位な有機合成誘導品を開発して参りましたが、今日、石油依存から脱却することがあらゆる業界の緊急課題となっている折から、いち早く当社の基幹製品である酢酸の製造プロセスを従来のエチレンを出発原料とする方法からメタノール法に切り替え、昭和55年6月より協同酢酸㈱にて同法で製造を開始しております。

この様に、ダイセル化学工業(昭和54年10月現社名に改称)は、長い伝統の中で有機合成と高分子の化学工業分野で研究を続け、新しい原料・素材をあらゆる分野に提供して参りました。

現事業の製品の主なものを紹介してみましよう。

セルロース部門では、酢酸セルロース、硝酸セルロース、たばこフィルター用アセテート・トウ、半合成糊料CMC、HEC、有機合成部門では、酢酸を始めとする100品目を越える有機合成薬品、中でも独自の技術を基盤としたファインケミカル製品は医・農薬の分野で新しい

\*石利治(Toshiharu ISHI), ダイセル化学工業株式会社, 取締役合成樹脂事業部副事業部長  
大阪大学工学部応用化学科卒

ニーズに対応しております。合成樹脂部門では、創業当初からのセルロイド、アセテート・プラスチック、AS・ABS樹脂、MS樹脂、合成樹脂エマルジョン、またコーティング技術を生かした高級包装用フィルム、印刷・電子・情報産業などの分野で開発を進めている機能性フィルム、特機部門では、ロケット推進薬、発射薬、航空機搭乗員緊急脱出装置と、宇宙に防衛に広く貢献しております。

その他、セルロース化学で培った技術を生かした逆浸透膜、限外濾過膜は濃縮、精製分野で広く採用されており、更に臨床医学分野における濾過型人工腎臓システムの研究も進んでおります。

## 2. 世界に誇る高い技術力

化学工業界の中でも当社のユニークな技術は高く評価されておりますが、特にセルロース化学技術はその代表的な例です。

その基幹をなす酢酸セルロースは昭和14年に工業化に成功して以来、たゆまぬ研究開発、用途開発により、現在ではアセテート繊維、たばこ用フィルター・トウ、映画や写真のフィルム、アセテート・プラスチックの原料として重要な役割を果たしており、その生産規模（7千T/月）においてもわが国最大であるばかりでなく、世界第三位の位置を占めており、需要は海外にも広まっております。

もともと酢酸セルロース事業は不燃性セルロイドを目的として研究なされたものでありますが、中でも写真フィルムの不燃化にかけた意欲が実を結び、その技術成果に対して昭和34年富士写真フィルム・小西六写真工業と共に、日本化学会より化学技術賞を授与、現在では国産フィルム原料にはほとんど当社の製品が使用されており、その技術水準は世界に誇るべきものがあります。

酢酸セルロースをベースとした用途の一つ、アセテート・トウにつきましては、昭和31年より日本専売公社と共同で製造研究に当たり、わが国で初めて開発に成功したものであります。

現在、わが国のたばこのほとんどにこのアセテート・トウをベースとしたフィルタープラグ

が装着されており、多くの愛煙家の方々にご利用頂いております。

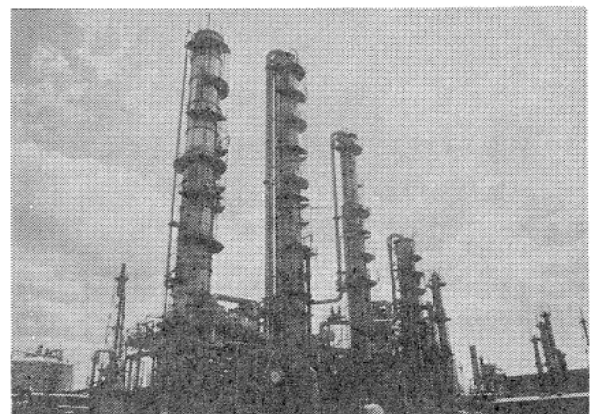
## 3. C<sub>1</sub>化学へのステップ

国際的なエネルギー問題が論ぜられている今日、脱石油は世界の大きな命題であります。特に原料のほとんどをナフサに依存しているわが国の石油化学工業は、天然ガスなどを原料とする外国製品に対する競争力の低下によって生産能力の過剰化、生産設備の合理化など諸問題に直面しております。

当社は国内における酢酸のトップメーカーであります。また当社の製品中その原料、中間製品、最終製品など60～70%が何等かの形で酢酸に依存しております。昭和48年の石油ショック以来、いち早く酢酸の原料問題にとり組み、ナフサに依存しない方向を検討、原料をメタノールによる製法に切り換えました。この製法に関する基本技術はアメリカのモンサント社によるものですが、わが国において初めて工業化に成功した当社の技術力については、世界的に高く評価されております。

メタノール法酢酸製造プロセスは、従来のナフサを原料とするアセトアルデヒド法、ナフサ直酸法、過酢酸法に比べ、メタノールと一酸化炭素(CO)を原料としている点で当然のことながらコスト的にもはるかに優位であり、わが国におけるC<sub>1</sub>化学への第一歩をしるしたという点で大きな意義があったと言えます。

その後においても通産省の大型プロジェクトC<sub>1</sub>化学開発母体である「C<sub>1</sub>化学技術研究組



合」の有力メンバーとして、更に次のステップを目指し、本格的な研究を続けております。

現在、メタノール法酢酸プラントは、当社網干工場内にある協同酢酸槽により、パートナー各社の協力を得て、22万5千T/年（能力）体制で順調に稼動いたしております。

#### 4. 新しい企業体質への展開

セルロイドを出発としてC<sub>1</sub>ケミストリーへと、当社は常に化学本業に生きる実力派企業として、その長い歴史を歩んで参りました。

そして昭和55年、従来の中央研究所を始め三研究所を統合した総合研究所（姫路市）の完成

により、一層意欲的、創造的な研究開発体制が確立し、激しい化学工業界の技術革新に輝かしい成果をあげております。

この技術を背景に、当社も「素材型」商品から「高付加価値」「高機能」商品への転換が促進されつつあり、企業体質も益々強くなっております。

中間原料メーカーとして独自の道を切り開く当社の製品は、直接消費者の方々の目に触れる機会は少ないのですが、「技術立社」としての基盤をもとに、化学を通して各産業の発展を促し、明るい未来をつくる立役者としての成長をめざしております。

